



令和元年(2019年)7月1日

No.2

豊中市立北条小学校



最近の6年生の全国学力調査から、漢字や言葉を正しく書くということが、苦手だということが分かりました。

例えば、次のような問題では、本校児童の結果は全国や大阪府の平均正答率よりかなり低くなりました。

<国語A8文の中で漢字を使う>(2018年全国学力・学習状況調査から)

矢野さんは、見学したことをノートにまとめています。右の[ノートの一部]をよく読んで、あとの問いに答えましょう。

(問い) [ノートの一部]のアからオの\_\_\_\_\_部は、どのような漢字を使って書きますか。

\_\_\_\_\_部と同じ漢字を\_\_\_\_\_部に使って書く文として最も適切なものを、次の1から3までの中からそれぞれ1つ選んで、その番号を書きましょう。

<ア>

1. せい限時間に気をつける。
2. 新せい品の価格を調べる。
3. 道具箱の中をせい理する。

<イ>

1. 新しい規則をもうける。
2. 劇のやくの希望を聞く。
3. 遠くへボールをなげる。

<ウ>

1. 細かい説明をはぶく。
2. ノートの文字をけす。
3. 運動会で赤組がかつ。

ノートの一部

おかし店の見学に行って分かったこと

○調理場には、生地を練る機械など、せい造に必要なせつ備がある。

○衛生を保つために、調理器具などを一日に何度もしょう毒する。

○お客さんにおいしいおかしを食べてもらうために品質をしっかりとかん理している。

○地元の野菜や果物などを使った新しいおかしをせつ極的に開発している。

オ

<エ>

1. かん成した作品を先生に見せる。
2. 近くの警察かんに道をたずねる。
3. ビーカーと試験かんを水で洗う。

<オ>

1. 三角形の面せきを求める。
2. 大会でよい成せきを残す。
3. せき任の思い仕事をする。

## <国語教育は社会全体の課題>

国語教育に関し、特に重要な役割を担うのは学校教育であるが、その中でも小学校段階における国語教育は極めて重要である。しかし、言葉にかかわる国語教育の問題は学校教育だけに限定できるものではない。家庭や地域社会における言語環境が、子供たちの国語力に大きな影響を及ぼしていることに配慮し、学校教育、家庭教育、社会教育などを通じて、国語教育を社会全体の課題としてとらえていく必要がある。(平成16年2月3日文部科学省文化審議会「これからの時代に求められる国語教育」から)

学校においても、漢字の読み書き、物語や説明文などの音読、視写、読み聞かせ、読書、話し合い活動など、言語力を育てるために学年に応じてさまざまな取り組みを行っています。国語以外の教科でも言語活動を大事にしています。しかし、家庭や地域社会における言語環境が、子どもたちの言語力に大きな影響を及ぼしていると言われていいますので、家庭でどのようなことをすれば、言語力が伸ばせるのか、参考になることを紹介いたします。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

## 「子どもの日本語力があぶない!？」

\*高濱正伸氏の文から要約(DIAMOND online, <https://diamond.jp/articles/-/59377>)

<子どもの語彙(ごい)を増やす「6つ」の方法>

### (1)「家族での外出」や「外遊び」で「感じる心」を育てる

国語のテストで問われる「物語の情景」や「人の気持ち」は、さまざまな「原体験」を積むことで、はじめて理解できるようになります。そのためには、「外遊び」や「家族での外出」がオススメ。「知識」として言葉を覚えるのではなく、経験の中で「体感覚」をともないながら、意味を理解する。そうすれば、文章中の見えない描写をイメージできるようになります。例えば、「夏の終わりの早朝、露をおいた草の上に座れば、お尻が濡れる」という文章を読んだとき、実際に「お尻を濡らした体験」がない子どもは、知識の域を出ることができません。「へえ〜、そういうものなんだあ…」で終わりです。ですが、実際の「原体験」がある子どもは、「あれか〜」と、「自分のお尻が濡れたとき」のことを思い出して、豊かな連想

力を働かせることができるでしょう。

## (2) 見たこと、感じたことを「比喩（ひゆ）」で表現する

「比喩」が使えるようになると、表現に奥行きが出ます。

「もみじがキレイ」と表現するより、「燃えるような、紅（くれない）のもみじ」と表現したほうが、赤々とした色彩を印象的に伝えることができます。

比喩表現は、慣用句として暗記するだけでは、なかなか使えるようにはなりません。比喩表現が使えるようになるには、親がお手本を見せてあげるといいでしょう。「実際の景色を見たとき（体験したとき）」に、「〇〇のような、△△」という表現を親が使ってみせるのがいちばんです。

「こういうときは『水を打ったような静けさ』っていうのよ」

「こういうときは『抜けるような青さ』っていうのよ」

すると子どもは、「何かにたとえると、表現に深みと味わいが加わる」ことを理解しやすくなります。

## (3) 子どもの疑問にきちんと答える

とくに小学校低学年までの子どもは、見聞きする言葉に、強い興味を抱いています。「それ、なに?」「あれ、どういうこと?」「これ、どういう意味?」と子どもが質問してきたら、きちんと答えてあげてください。

家事をしているときに、あれこれ聞かれると、「忙しいのに、ヘンなこと聞かないでよ」と突っぱねたくなる気持ちもわかります。

でも親は、子どもの好奇心に水を差してはいけません。子どもの「どうして?」には、真剣に付き合ってください。

もちろん、親にだって、答えられないことがあると思います。そんなときは、「どういうことだろうねえ?私にもわからないなあ。じゃあ、一緒に調べようか」とか、「あとで調べて教えてあげるね」と返事をして、子どものやる気につなげてあげてください。

## (4) リビングに「辞書」を常備する

言葉の正しい意味や使い方を理解するために、ぜひ、「辞書（国語辞典や漢字辞典など）」をたくさん使ってほしいと思います。

中学3年生を対象に、「お父さん、お母さんは、辞書を引く人ですか?」という質問をしたところ、「親が辞書を引く頻度と、子どもの国語力」が、完全に正比例

していることがわかりました。

子どもに「辞書を引きなさい」と諭すだけでは、ダメです。子どもに辞書を引く習慣をつけさせるには、親もその習慣を持つことが大切なのです。

親が「わからないことは、すぐに調べる」という習慣を持つ。そして、辞書を引く姿を子どもに見せてあげる。そうすれば、子どもも、「わからない言葉をそのままにしちゃいけないんだ。わからない言葉があったら、調べよう」と思うようになります。

### (5) 「日記」をつけさせる

「書くこと」に慣れさせるには、「日記」がオススメです。日記は、自分が体験したこと、自分が感じたことを「正確な言葉を使って書く」ためのトレーニングにもなります。

1日に書く量は、多くなくてもかまいません。1行や2行でもいいので、「とにかく毎日の習慣にすることが、最も大切」です。

日記は、「正直な自分」と向き合う場でもあります。

もちろん、小学校低学年までの子どもは、「その日の出来事」を書くだけで精一杯でしょう。

けれど小学校高学年にもなれば、自分のドロドロしたところ、嫌いなところ、情けないところなど、「いいがたい自分の心境を言語化しよう」とします。自分の思いのたけを綴ることで、心の整理や心の浄化ができるからです。

子どもに日記を書かせるときは、ひとつだけ、条件があります。その条件とは、「子どもが小学5年生になったら、親は子どもの日記を、絶対に見ない」ことです。親が子どもの日記を見ているうちは、子どもは「自分の本音をさらけ出す」ことができません。5年生になると、子どもは、「親の前にいるときとは、まったく違う自分」を持つようになります。

### (6) 名文を書き写させる

日本の名文・詩・唱歌や童話などの文章を写すことで、日本語の語感、リズム、詩的な表現を味わうことができます。

書き写しは、「読む」よりも時間がかかりますが、その分、言語知識が子どもたちの頭に深く沁（し）み込んでくれます。